

W.C.ミッチェルの方法論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内田, 成 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/682">https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/682</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# W.C. ミッチェルの方法論

内 田 成

## 1. はじめに

ミッチェル (Wesley Clair Mitchell, 1874-1948) はヴェブレン (Thorstein Veblen, 1857-1929) やジョン・R・コモنز (John Rogers Commons, 1862-1945) らとともに制度学派の建設者の一人であると同時に、ヴェブレンの弟子の一人であり、合衆国における「数量経済学」のもっとも傑出した代表的人物である、といわれている<sup>(1)</sup>。その景気循環の領域におけるその先駆的な業績は、その広範囲に及ぶ理論的な見解を示しており、その領域において多くの卓越性を与えている、と評価されている<sup>(2)</sup>。1874年にイリノイ州のラッシュビルに生まれたミッチェルはシカゴ大学で学んだが、そこでヴェブレン、ジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952)、ジャック・レーブ (Jacques Loeb, 1859-1924) などの影響を受け、プラグマティズムの哲学や経済学の研究に興味を持つようになった<sup>(3)</sup>。ミッチェルは最初にグリーン・バックスの研究に着手したが、これは彼の研究の出発点となるものであった。その後『景気循環論』や『経済理論の諸類型』など多くの著作を刊行し、アメリカ経済学会の会長やその他の要職にも就いた。

ところでミッチェルはさまざま思想の影響を受けているが、人間の思考の本質や人事における哲学の役割に関する革命的な考え方をもっていたデューイが非常に大きな役割を演じている、といえる。ミッチェルが人間行動の本質の理解が経済学にとって重要性があると考えようになったのは、デューイのプラグマティックな心理学との接触がその契機となっていることは間違いない。ミッチェルが古典派経済学および新古典派経済学の心理学的基礎の吟味に着手しているのが、その一例である、といえる<sup>(4)</sup>。

そこで本稿では、制度派経済学研究の代表的人物であるグルーチャー (Allan Garfield Gruchy, 1906-1990) の著作『近代経済思想：アメリカの貢献』に収録されている「第4章 ウェズレー・C・ミッチェルの数量経済学」の中の「ミッチェルのプラグマティック心理学」と「数量的分析手法」を採り上げ検討することとした<sup>(5)</sup>。

## 2. ミッチェルの基本的な分析視角

グルーチャーによれば、ミッチェルの経済学を理解するためには、経済学の心理学的基礎についての考え方を理解することが最も重要である、という。多くの経済学者とは異なりミッチェルは心理学に深い造詣があったし、特に 20 世紀の初頭以降の新しい心理学の考え方の趨勢もよく知っていた。ダヴェンポート（Herbert Davenport, 1861-1931）のような経済学者とは異なり、ミッチェルが伝統的経済学の心理学的基礎を批判したのは、心理学と経済学を分離するのではなくて、むしろこれらの関係を徹底的に研究すべきである、と考えていたからである。彼は古典派経済学および新古典派経済学の快楽主義的先入観を攻撃することが経済学にとってより適切な心理学的基礎の必要性を考えるために必要である、とみなした。彼の考えでは経済分析に必要とされるものは心理学以外の何物でもなかった。ミッチェルは経済学と心理学の間の関連についての強い関心をもっていたので、経済学の本質と領域に関する新たな見解を展開することができた。実際、ミッチェルの経済学は人間行動の本質についての独自の見解を反映している。彼は人間性の理論と構築された経済体系との間には直接的な関連がある、と考えていた<sup>(6)</sup>。

ヴェブレンと同様ミッチェルも 19 世紀のイギリス経済学の心理学的先入観の批判者であった。彼らは共に経済学の心理学的基礎を近代化しようとしたが、経済行動の研究に対するアプローチにはかなりの差異が存在する。この点についてグルーチャーは次のように指摘している。「ヴェブレンの人間性の概念はダーウィン（Charles Darwin, 1809-1882）やジェームズ（William James, 1842-1910）に基づいている。ヴェブレンの創造的な研究をおこなっていた時代において近代心理学はその基礎がようやく築かれつつあった。心理学はまだ大部分において非経験的で思索的であった。統計的な分析は、まだ発展の初期段階にあった。したがって決して統計的技術を利用することはなかった、ダーウィンのように、ヴェブレンやジェームズたちは実験的というよりもむしろ思索的になりがちであった」<sup>(7)</sup>。また、ミッチェルはヴェブレンについて次のように述べている。

「彼が人間の行動を考察した時に見たものは、その他の経済学者とは異なっていた。というのも、彼の人間性の概念は、より最近の心理学の考え方を見につけていたからである。…ヴェブレンは古典派の大家達の標準的な慣行に執着した。彼は人間行動を論ずることを選択した。しかし、彼は現実の行動を説明しようとしたのであって、人間が『標準的に』行なうことを説明しようとしたのではない」<sup>(8)</sup>。

ヴェブレンにとって経済法則よりも、観察によって事実を明らかにすることが目的であり、重要性をもっていた。しかしミッチェルはヴェブレンのアプローチの欠点を見ていた。ミッチェル

はこう述べている。「彼（ヴェブレン—筆者）は事実に基づく研究を殆ど行っていない。その命題の大部分は現在われわれが使用できる手段で客観的に考査できるタイプのものではない。全体として彼の研究はダーウィンの研究と似ている。つまり、門外漢にとって、また研究者にとっても途方もなく刺激的で非常に組織化された非常に広範囲にわたる観察を統一したひとつの思索的な体系であるが、その最終的にその正当性を認めるためには、より徹底的な研究をしなければならない」<sup>(9)</sup>。

つまり実験心理学がある程度本質的な進歩を遂げるや否や、人間本能は分析をすることが殆どできない、ということがわかった。本能は科学的な測定を受け入れないために、以前のように関心を惹きつけなくなった。この点においてグルーチャーはヴェブレンとミッチェルの心理学的分析の間の相違点についてこう述べている。「ヴェブレンと異なりミッチェルは人間性の分析において思索的というよりもむしろ経験的である。彼は本能心理学を殆ど利用しないし、J. B. ワトソンの心理学のより行動主義的な見解を採ることの方を好んだ。それはミッチェルが経済科学の心理学的基礎を革新しようとしていたのと同じ時に発展しつつあった」<sup>(10)</sup>。ミッチェルによれば、人間性は人間の外面あるいは内面のどちらからでも分析することができる<sup>(11)</sup>。もしも人間性を外面から研究するならば、社会心理学の領域から入ってくることになる。この視点からは個人行動に影響を与えている多くの社会的な行動パターンを明らかにすることができる。ミッチェルは、経済学者が、この社会的行動の領域に着手すべきである、と信じていた。というのも人間行動を客観的に分析できるからである。古典派経済学者は経済行動を個人の内側から吟味することを選んだ。経済学の発展の初期の段階では、この方法はある程度の正当性をもっていた。しかし現在の科学的思考の発展との関連においてミッチェルは、経済行動の研究において内省的なアプローチは、あらゆる専門的な科学的方法の中でも最も頼りにならない、と看做した。というのも、ミッチェルにとって重要なものは、客観性であったので、人間行動についての歴史的ならびに統計的な手法を利用し、集団行動の観察が経済研究の新しい領域として重要である、と考えた<sup>(12)</sup>。

社会心理学の考え方を取り入れることでミッチェルは経済行動に影響を与える法律や経済体制などの重要な社会制度の研究を推し進めることができる、と信じていた。生物学的な傾向や人間の理性は常に人間行動に影響を与える重要な要因ではあるが、それらは社会的な行動パターンを通じて作用する。ミッチェルの動機づけ理論は社会的であり、それは古典派あるいは新古典派経済学者の動機理論と対照的である。彼は人間行動の本質に関して、個人は異なっているが、ほぼ固定されている非常に多くの生得的な反射行動や本能によって生活を始める。そのような行動は非合理的な行動形態である。しかし人間は学習する能力をもっており、それは他の人間との交りによって発展させられる。ミッチェルは知性が主として社会的産物である、ということに気づいていた。人間の知性は人間の本来的な性質から生ずるが、個人の知性のもっている特定の性質は

彼が育つ社会に依存している、と看做した<sup>(13)</sup>。

個人の知性の発展においてミッチェルは、実践的な技術、書くこと、話すことおよび宗教に対して特に重要性を与えている。これらの制度は「その社会にとって承認されている標準的な行動習慣は、しばしば繰り返される状況に直面して感覚、行動および思考の習慣を与える」<sup>(14)</sup>。それは最終的には社会制度に具現化される。ミッチェルは、すべての制度が合理的な基礎をもっているわけではないが、知性の活動が十分に日常化した場合、それが社会制度という形態を採る、と考えた。それゆえにミッチェルは「今日のうまくいった慣例は昨日の創造的な知性の勝利を留めている。そして、もしも今日の懸念な思考が同様にうまく行ったら、それは明日の慣例を構成するだろう」<sup>(15)</sup>と主張した。人間の知性を育て、人間行動を形作るというタスクにおいて主要な役割を果たすのは、これらの社会的制度である。個人は制度にもとづいて自らの行動を標準化し合理化するからである。

社会制度は人間行動を方向づける強力な要因であるので、どのように個人が行動するのかについてのいかなる適切な説明も制度的見地からおこなわなければならない。これらの制度の範囲が個人行動における合理性の基礎を与えている。「合理性の基礎を発見するためにわれわれは、感覚的要素である経験の総計から抽象したり、愉快的種類のものか不愉快的種類のものかを判断したり、また、それらの程度を比較するために能力という個人の内部に注意を向けてはならない。むしろわれわれは、社会によってゆっくりと進化する行動習慣や彼自身によって苦心して学習された個人の外部に注意を向けるべきである」<sup>(16)</sup>とミッチェルは述べている。19世紀の経済学者たちは人間の行動を根本的に合理的である、と仮定し、いかに人々が自由放任経済において行動するか、また、いかに彼らがその合理的な能力を表現するか、を説明してきた。ミッチェルは、自由放任経済の制度が人々を条件づけ、習慣や慣習ということがらとして、完全に合理的な個人というポジションにアプローチするシステムに習慣づけられる、という反対の見方を持っていた。換言すれば、人間性を厳格で非常に合理的な行動様式に押しやるように作用する制度的圧力が存在する。中世の終わりにおける商業資本主義の発展以来、特定の経済制度が近代文明の大部分を形づくり、支持されるようになってきた。これは貨幣制度として知られるようになった非常に合理的な習慣である。それは、その他のどんなものよりも、近代資本主義の精神のトーンを決定しているものである。金儲けと金の支出のプロセスは独自の特異なロジックを持っている。人々は異なった数量の異なった財の相対的重要性を評価し、そして金銭的評価を行なうことでその利子を考慮する。このようなやり方で、貨幣制度の影響が広がり、その他の制度化された行動に影響を与える<sup>(17)</sup>。その結果として、今日の生活は標準化され、合理化されるようになるのであり、人間の心に存在している何らかの固有の合理性の原則や何か漠然とした絶対的な理性の標準や進歩した資本主義社会における貨幣の利用の要求にしたがうわけでもない。

貨幣利用の影響は金儲けほど貨幣の支出においては重要ではない。これは金儲けが家庭経済の運営においては標準化され、合理化されていない社会習慣のためである。したがって、それを説明するためには、家庭生活を導いている思考および行動の習慣的方法を明らかにしなければならない。ミッチェルは「The Backward Art of Spending Money (1912年)」<sup>(18)</sup> という論文において、家庭経済でみられる浪費行動を痛烈に批判した。この貨幣を使うさいの常識の欠如に対するミッチェルの解決法は金儲けを計画するのと同じくらい注意深く貨幣支出を計画すべきである、ということであった。貨幣の支出は20世紀文明の要求に相応しい消費習慣の発展によって一層標準化され、合理化される。ミッチェルは購買および消費慣行を重視する合衆国における最近の消費者運動の進展を非常に満足し見ている。しかしながら、そのような運動の進展は、長期的には、貨幣制度の影響の範囲の中で家庭経済の運営をもたらす社会習慣の発展と普及に関して将来の消費者の合理的な能力にそれほど多くは依存していない。人々は一般に合理的能力に訴える基礎よりも、深くしみこんだ社会習慣のことがらとして購入するように誘導される。ミッチェルは、大部分の人々は批判的な思考なしに、その世代によって与えられた陳腐で因襲的な価値の尺度を受け入れつづける、ということを指摘している<sup>(19)</sup>。

人間行動形成における社会習慣の主要な重要性および人間の理性によって演じられる小さな役割の強調は、多くのミッチェルの批判家が、人間性の過度の行動主義的な解釈に固執していると非難する原因ともなった。批評家の中には、ミッチェルが特に統計的に処理できる行動パターンの研究に多くの関心を払い、経済活動のより意志的な側面に対してはほとんど関心を払わなかった、と主張する批評家もいる。

経済行動が習慣的の反応という問題以上であるということは明らかであるし、経済行動の十分な理解には習慣的側面のみならず意思的あるいは目的的な側面への研究も含まれる。心理学的分析におけるバランスの欠如は、ミッチェルが経済学研究の新しい領域の先駆者として研究をしていたためである。

社会心理学という領域へのミッチェルへの関心から判断すると、その経済研究が経済行動の広い領域にまで及んでいることがわかる。その分析は、生産プロセスから消費の領域まで広がるヴェブレンの研究に匹敵するといえる。しかしながら、ミッチェルがその分析をビジネスシステムに限定した、ということはミッチェルの場合には真実ではない。ビジネスの世界でも、非常に高い合理性にもかかわらず、多くの習慣的行動様式がみられる。実際、ビジネスマンの行動が非常に習慣的であるために、景気循環の全理論は繰り返される経済的刺激に対応する慣習的企業の反応を基礎に組み立てている。ミッチェルはビジネスシステムの研究をはるかに超えることはなかったが経済システムには包含されない経済行動のより広い領域を研究するという課題を残した。ミッチェルの経済学の心理学的基礎への関心は、彼自身の心理経済的な問題における広範囲における

研究の基礎というよりも経済学のその後の世代にとってのインスピレーションの基礎となっている<sup>(20)</sup>。

ミッチェルの心理学的見解は古典派経済学や経済学の将来に対するその態度形成に大きな影響を及ぼしている。彼は堅固な帰納的基礎を欠く分析を回避しているし、純粋理論の代表者の主張に重大な疑念を抱いている。社会制度へのその関心は、社会行動という集団現象の研究に非常に適している統計的方法に対する傾倒と符号する。そのような研究は過去および未来に対する研究を方向づけるという長所がある。すでに1915年にミッチェルは次のように説明している。「制度を研究しているということが分かっている人は、たとえ制度がその進化の特定の段階にあると仮定した形態を分析することに限定した場合でさえ、その研究を歴史的パースペクティブにおいている。そうすることで閉鎖的な知識の体系を提唱する代わりに、未来の探求のための魅力的な展望を広げている。彼は、いかなる人の個人的経験も、いかに人間が行動するのかということについて理論化するための十分な基礎となる、ということを感じるように欺かない。むしろ彼は歴史、統計学、民俗学および心理学といった何らかの学問の分野によってその問題を解明しようとする」<sup>(21)</sup>。

ミッチェルの心理学的理論と経済の本質についての機能的な見方との間には重要な関連がある。その心理学的理論によれば、人間は本質的に活動的な被造物であるが、活動に対するその傾向は、少なからぬ妨害に直面する。生まれてから個人を取巻いており、個人が何らかの精神的な弾性を保持している限り影響を与え続ける全体としての制度的複合体が存在する。しかし社会制度は人類の欲望に適合するように変化するかもしれない。

ミッチェルが次第に経済学改革および経済再建という問題に関心をもつようになったのは、1929年になってからである。彼はウォーレス（Graham Wallas, 1858-1932）の『大社会（1914年）』に非常に関心をそそられた。その著作は不調和が近代の政治社会組織とより以前の世代から引き継がれてきた習慣的な思考および行動との間に増大する、ということを描いていた。経済システムを見る際にミッチェルは、類似した不調和を近代経済の要求と因襲的な行動様式との間に見た。経済的不調和の期間が1929年以降に到来を告げたとき、ミッチェルにはそのような事態に対する十分な用意ができていた。というのも、ミッチェルの心理学的理論が経済的不安定性の説明のための基礎となるものであったからである。

ミッチェルは、経済学者が心理学という発展しつつある科学に非常に多くの独自の貢献をするものである、と感じていた。その理由は、経済学者自身ほど人間行動の経済的側面に精通しているものはないからである。人間行為を形成する経済的な要因の重要性に言及する数少ないものの一人であるミッチェルは「人間性は大部分社会的な産物であり、社会的な行動の中でも最も基本的なものは特に経済学者が取り扱う一組の活動である」<sup>(22)</sup>と述べている。また、それは何故経済

学者がその科学的分野の進歩を推し進める際に心理学者と強調するために最も有利なポジションにいるのか、という理由である。経済学は「存在しない条件下の金銭的論理、静的均衡の機械的研究のシステムであることをやめ人間行動の科学になった」<sup>(23)</sup>。次に経済学は人間行動についてのより大きな科学のあらゆる特定の分野であるその他の社会科学と並んで正しい位置にすえられることが可能となった。人間行動の科学として経済学は行動における制度的要因によって演じられている役割により多くの関心を払うようになり、人間の心の主観的作用には余り多くの関心を払わなくなった。ミッチェルの経済分析は主観的な個人行動よりも客観的な大衆行動に関心を持っているから、彼は新古典派経済学者の個人主義的観点とは区別されるその心理学的アプローチは行動主義的観点に立つアプローチと呼ぶことができよう<sup>(24)</sup>。

### 3. 数量的分析方法

次に上で見てきた心理学的アプローチをとるミッチェルの方法論について見ることにしよう。グルーナーによれば、ミッチェルの心理学的見解と科学的方法の哲学との間には緊密な関連があり、その議論を貫くそのプラグマティックな傾向は明らかにはっきりとしている。その社会心理学と同様に経済的研究における数量的分析の重要性の強調をとまなうその科学的方法は当時のアメリカの科学的思想のプラグマティック傾向を反映している<sup>(25)</sup>。

経済理論における数量的分析の役割に関する論文の中でミッチェルは、経済現象の研究における質的アプローチと数量的アプローチについて触れているが、方法論をめぐる反目には関心がなかった、といえる。彼はこう述べている。「経済学において、われわれが行なわなければならない多くの種類のテーマがあり、多くの資質を持った研究者がいる。しかし、われわれが方法に関する論争に異なった好みや意見を包含させようとするのは全体としてほとんどありえず、嘆かわしいように思われる」<sup>(26)</sup>。方法という問題に対してミッチェルはこのような態度をとり、経済現象の研究に対するあらゆるアプローチに寛容さをしめしていたが、彼自身は無意識に数量的分析の本質と重要性を認め、そのアプローチに対する好みを示している。ミッチェルが景気循環に関する先駆的な研究を提出した時に、経済分析がまだ非常に演繹的で思索的な性質を持っていた。正統派経済学の批判家でさえ、自らを類似した演繹的傾向から自由になることができなかった。例えばヴェブレンは古典派経済学の過度に演繹的方法の批判することに決して飽きなかった。彼は膨大な歴史的データ蓄積を大いに利用をしたが、さまざまな経済的ファクターの重要性を測定する、あるいはさまざまな仮説を検証するような場合には正統派の同時代人とさほど違いがない、といえる。シュモラーあるいはヴェブレンの手における歴史的方法は、幾人かの社会思想家が期待したほど実りあるものであるとは証明していない。というのは、精錬された統計的技法なしに

は、歴史的データの蓄積から多くの重要なものを引き出すことは非常に困難であったからである。ミッチェルが20世紀の初頭に経済現象の研究に導入したとき、彼は歴史学派が彼らの非常に抽象的な立場に立つ分析的経済学者を駆逐しそこなっている、ということに気づいた。事実、歴史学派は決して正統派経済学の強力は立場を脅かさなかった。それは苦勞して集めた膨大な歴史的データを効果的に利用することができなかった、という理由のためである<sup>(27)</sup>。

ミッチェルは歴史学派の経済学者の研究において欠けていた要素を経済分析に与えようと努力した。『景気循環』(1913)の初版の序文の中で彼は、ここに納められた論文は「近代の世界におけるビジネスの繁榮、危機、不況や回復などの時期が現実世界において生ずる複雑なプロセスについての分析的記述(analytic description)を与える」<sup>(28)</sup>ものである、と説明している。科学的方法論の分野における貢献であると看做されたのがミッチェルによって選ばれたこの「分析的記述」である。ミッチェルは、さらに続けて次のように説明している。「分析的記述」は歴史的データあるいは現代のデータの累積に過ぎない通常のあるいは単なる記述以上のものである。通常の記述は累積されたデータに不可欠な秩序や一貫性を与える十分な体系的な基礎が欠けている。ミッチェルの見解では、分析的記述は単なる経験主義を超えている。というのも、それが帰納法的に研究されたものについての体系的な説明を与えるからである。「真剣に考えられている周期的な変動についての体系的な説明は、そのプロセスについての分析的記述となる。それによって企業活動の所与の段階は、やがて別の段階に入ってゆく」<sup>(29)</sup>。この循環についての「体系的説明」は景気循環の記述に対する統計の数量的方法の適応を通じて得ることができる。というのも、それは統計のカテゴリーにおいて累積されたデータを配列しているからであり、具体的な歴史的データの入り混じった情報から統計的パターンを作るからである。

景気循環という特殊な問題に言及し、ミッチェルは、通常の記述はあらゆる多様性や不規則性をともなう歴史的記録の現実の循環を取り扱うが、19世紀タイプの循環理論は「ある種の憶測的解釈の循環」を取り扱う。彼自身の分析的記述は単なる記述と正統派理論の間の妥協点に基礎をおいており、ミッチェルが中間にある秩序の循環と呼んだものと関連している。これらのものは歴史的あるいは思索的のいずれでもなく、典型的あるいは統計的な循環である。蓄積された経験的データをさまざまな統計的パターンのモデルに移すことによってミッチェルは過去の歴史家ができなかったものをなすことができるポジションにいる。彼は経済のプロセスの中で作用しているさまざまな要因の重要性を測定することが可能であることに気づいた。歴史的な記録の統計的分析は未処理のデータ予備的処理、満足できる測定単位の採用および観察による情報の整理ということをもたらす<sup>(30)</sup>。

ミッチェルの分析的記述はゾンバルト、ヴェブレン、コモンスなどの記述的分析とは全く異なっている。ゾンバルトらがさまざまな経済制度の起源や発展に関連しているデータを収集し、次に

経済的解釈にとって本質的なものを提示するためにできうる限り蓄積したデータを体系化するのに対して、ミッチェルは同種のデータには殆んど関心を払わなかった。すなわち統計的に計測できるデータのカテゴリーに入っていない現象には注意を払わなかった。『景気循環論』を書いた1913年にミッチェルは、歴史的、非統計的データを重視するその他の経済学者の記述的分析は、非常に重要であるけれども、経済科学の発展段階のある段階において有益であるかぎり実施されるべきである、と考えていたと思われる。ゾンバルトやヴェブレンのような思索的な理論的経済学者の広範囲におよぶ一般化を科学的に検証する研究はとても必要であった。これらの経済学者が始めたすばらしい研究は、大量の経済データを取り扱うための新しい技術が開発された時に、さらに進められた<sup>(31)</sup>。このようなことを考慮して、ミッチェルは「景気循環によって示された現象を評価するさいに非常に気をつけて」<sup>(32)</sup>着手した。循環の分析は経験的であるべきというだけでは十分ではなく、この分析が定量的あるいは統計的に経験によって証明できる、ということが本質であった。

ミッチェルの科学的方法論の目的は、演繹法と帰納法、理論と実践との間の適正なバランスを与えることにあった。しかしながら、このバランスを追及する際にミッチェルは改善するためのいかなる新しい思考の手段も展開しなかった。ミッチェルの数量的分析は19世紀から20世紀の転換期以来社会科学者によって使われてきた一般的な帰納法的アプローチに改良を加えたものに過ぎない。ミッチェルの方法論に関して重要なものは、彼が古典的経済学者および新古典派経済学者の演繹的基礎を補う新しい企てを象徴している、ということである。正統派経済学者は演繹的スキーマを考案し、その実証について述べている。ミッチェルは、その分析的記述を導くいかなる解釈の枠組みをもとまう帰納的研究を開始するというもうひとつの極端な状態には進まなかった。ミッチェルは次のように彼の方法論の手順を説明している。「私にとって、私が知っているあらゆるものの助けを借りて景気の膨張と景気後退に含まれる交錯するプロセスをとことん追及し、観察されたデータによってできうる限り推論をチェックしたようにおもわれる。しかし、ある結果を演繹し、あるいはむしろ確実性をともなう結果を帰納すること行なうことは私にとっては簡単なことではない。ビジネス技術の作用には、もしも私が常に観察に立ち返らなければ考えなかった多くのものがある。また私は、もしもチェックすることができなかつたら、ビジネスマンがすることについての私の推論を信頼すべきではない。おそらく私がおこなおうと思ったものは、単にミル（John Stuart Mill, 1806-1873）の完全なメソッドの要求を行なうことである。しかし、そこには、わたしがミルのバージョンで覚えたように思われるよりも、それぞれを修正し、その他の価値をたかめる仮説と観察の間に非常に頻繁に行きつ戻りつする。おそらく私は記憶というデフォルトを通じてミルを論理学者として誤解していたのであろう。しかし、私が演繹的スキーマについて考え、その実証について述べるようにするさいにひどい考え違いをした、という場

合、わたしは古典派経済学を誤解していたとは思わない。科学が確立された理論体系の細部を精緻化する段階になるまで——つまり、軌道から外れた惑星を発見する、あるいは元素表のギャップを埋める——、立証、修正、斬新な意見のプロセスから除外される妥当なものを保持される多くの機会にある仮説を得ることができるように思うのは向こう見ずである」<sup>(33)</sup>。

その他のプラグマティストの方法論と同様にミッチェルの方法論は非常に実験的であり、慎重である。主としてヴェブレンやゾンバルトなどから借用した経済システムの本質についてのわずかな一般的な観念でスタートし、ミッチェルは経済システムの動きに特に関心をはらう経済的な一般化の構築に進んでゆく。本質的にミッチェルの方法論の手順は、仮定的な標準的な行為に対する一組の仮定された動機や環境から合理化される正統派経済学者とは反対であった。ミッチェルは現実の行為や環境から一般的な経済行動のパターンを推論した。新古典派分析において経済的規範は非経験的であり非歴史的であったが、仮定によって確立された経済行為の抽象的標準である。これに対してミッチェルの経済行動の規範は経験的で歴史的でもあった。それらは統計的な規範である。そこでは構成する要因の相対的重要性は数量的に決定される。このようなやり方で、統計分析を通じて景気循環史の多量のデータを注ぎ込むことで、ミッチェルは観察の結果得られた混乱したデータの中に秩序を創造しようとした。彼によれば科学的分析という道具には非常に多くの相互に関係のある函数の間の同時に作用する変化量を取り扱う、という問題を処理する能力がない。しかし、相互に関係のある函数のうち限られた数の変数に基づいている統計的規範が経済活動の十分な理解を追及するという仕事においてはかなり役に立つと考えられる、と思っていた。自然科学者の方法論的手順をできうる限り取り込むことで、ミッチェルは景気循環の統計的なパターンを組み立てた。経済理論の改善のためには、いかに経済的な一般化が十分に現実の経済的経験という事実と対応するか明らかにするために観察を通じて実証されねばならない、と考えていた<sup>(34)</sup>。

多くの人はミッチェルの科学的方法が過度に帰納的である、と看做している。ミッチェルが科学的研究におけるすべての異なったアプローチについて寛容であると主張する時に非帰納的手順にリップサービスをしているに過ぎない、と思っている。たとえば、1924年の「経済学の趨勢」という論文の中で、ミッチェルは統計的方法への熱狂にしばしば我を忘れてるように思われる。彼は「統計的な方法の拡張と改善は、それゆえに、経済理論の進歩のための第一の重要性をもっている要因である。次第に経済学は数量的科学になった。それは経済的動機に関する難問にはほとんど関与せず、経済プロセスについて、それが与える説明の客観的妥当性により多く関与するようになった。経済学者が現実の問題に直面するに比例して、彼らは一般理論でさえ数量的様式に入れるように努力した」<sup>(35)</sup> といっている。そして、また、1930年には次のように述べている。「思索の種類経済理論は、より高度の数学あるいは詩——才能を持っていると与えられる——

を生み出すことなど簡単である。そして、これらの想像的産物と同様に現実に対する同じ問題をはらむ関係がある」<sup>(36)</sup>。これらの発言から、行動主義心理学者が心理学という科学に対して企てたものをミッチェルが経済学に関して行おうとしたことが明らかになってくる。表面的に、ミッチェルは経済学説の妥当性に関連した質的考察を無視するほどまで「客観的妥当性」を過大評価していた、と思われる。しかし、グルーチャーによれば「彼は、さまざまな著作の中で、このような見方を支持しているように思われるが、その方法論の詳細な吟味は、この結論を支持しない。もしもミッチェルが経済研究に演繹的アプローチを、そのような研究がほとんど価値のないためにほとんど利用しなかったのではなくて、直接的改善のための最大の機会を数量的問題を攻撃に存在すると感じたためである。これが、ミッチェルが経済的研究を始めたときにほとんど開拓されていなかった研究領域だったので、彼がその時間の大部分が経済分析を数量的段階へ進めるために費やされたことは驚くべきことではない」<sup>(37)</sup>。

ミッチェルが経済科学の将来の進歩における数量的分析の役割を考えるようになったときに、その科学的方法に関する考え方はいくつかの問題に対して利用できるようになった。1929年に彼は「現在の研究のトレンドは、抽象的なものや想像的なものよりも具体的なものや現実的なものを直接取り扱う方向に向かっている。…必須のデータが利用できる限り数量的分析を利用しようという著しい傾向が存在している。また、私は数量的な観点から取り扱うことができる問題を好む傾向の増大を感じている」<sup>(38)</sup>と予想している。グルーチャーによれば、その後、帰納法的研究が非常に増加していることは事実であるけれど、分析的な研究のいかなる減少もないみられないこともまた事実である。不完全競争の経済学の発展や完全雇用や資源の最適利用のような問題の分析は経済学における抽象的および数理的アプローチにとって新たな刺激を与えている。数理経済学の始祖クルノー（Antoine Augustin Cournot, 1801-1877）は復活し広範囲におよぶ人気を博している。多くの経済学者は新古典派と呼ばれなくなるかもしれない。しかし、彼らは未だにかつては活発であったマーシャル主義的思考の伝統を維持しているが、経済学の領域における演繹的分析の衰退についてのミッチェルの予想が大部分は望ましい考えという結果になった、ということを示している、といえる<sup>(39)</sup>。

多くの経済学者の考えでは数量的分析の主要な目的は新古典派学説の容認された体系の統計学的証明にあったが、ミッチェルの見解ではそうではなかった。彼の見解では、19世紀の経済学者の質的分析から引出された経済学説の大部分は統計学的分析によって立証することができない。そのかわり近代の経済シーンの数量的分析は、ある場合には古い理論の書き直しを要求としているし、その他の場合には古い理論の代わりに新しい理論を置き換えることが要求される<sup>(40)</sup>。「実際に私は現在の形態で数量的分析が構想した問題を解くことができる、というわずかな見込みがある、ということをもさらに進んで、いう傾向がある。われわれが予測しなければならないことは、

古い問題を統計的な取り組みに馴染みやすい新しい形態に作り直すことである。この問題の刷新の経過において、経済理論は単にその外観を変えるだけでなく、その内容も変える」<sup>(41)</sup>。ミッチェルは、数量的方法は、経済理論の内容を変える以外に、経済科学の領域に新しい統一をもたらすことを助ける、と信じていた。その他の社会科学のように経済学も人間行動を理解するという共通の目的、行動記録の数量的分析という共通の方法および行動を検証する方法を工夫するという熱望を持っている。専門的な数量的研究は全体の貨幣経済として知られている支配的な制度の複合体の吟味と統合される。ミッチェルは、もしもこれが行なわれたら、多くの特殊化された無関係な経済研究に統計的分析を退化させる危険はほとんど存在しない<sup>(42)</sup>。

グルーチャーによれば、数量的分析はミッチェルの見解では、経済研究の領域における別の貢献の見込みもある。たとえば経済福祉という困難な問題は、もしも経済学者が福祉の内容が吟味されるべきものを考慮して客観的な基準の領域を拡大することに成功したならば、福祉の難解さのあるものを取り去ることができるかもしれない。というのも、経済福祉はしもわれわれが福祉についての客観的な尺度に関して合意できるならば、研究されるべき科学的基礎をもつことができるからである。経済福祉に関するこれらの客観的な指標を作り上げるさいにミッチェルは、数量的経済学者が将来一層重要な役割を演じる、と感じた。さらに、われわれが経済福祉の客観的基礎を見つけるために努力するためには、実験的な政策を展開し、将来のために計画を作るためのよりよいポジションにいるべきである。経済システムについての数量的分析を拡張するにつれて、ある種のコストの科学的測定と経済的実験の結果をえるようになる。このような方法においてミッチェルは数量的分析が社会の盲目的な手探りを知的な実験のプロセスに変えるために不可欠であることを証明できる、と信じていた<sup>(43)</sup>。

ミッチェルは統計データの蓄積、統計技術の発達、さまざまな研究の普及がもたらす経済学の進歩を期待していたけれども、彼自身は数量的アプローチの潜在的な有益さに我を忘れることはなかった。どの方法論的アプローチも有利さを持っており、何らかのひとつの分析方法にあまりに多く依存している場合、不幸な結果が生ずる。真実は質的分析と同様に量的分析によっても容易に歪められる。実際、数量的方法の限界に全く気づいていない統計学者は経済生活を数理経済分析の柔軟性のない様式に移す経済学者と同様に経済的現実をほとんど歪めてしまう。ミッチェルは「経済学における統計的手順の批判的取扱いの必要が存在する。そこには、統計技術の魅力はデータの不完全さや不十分さに対する盲目的熱狂が存在する。巧妙な方法における統計系列の精緻化をする人は一組の推論に過ぎない仮説を考案する人と同様に現実に触れることからはるかに離れてしまう」<sup>(44)</sup>と主張した。

ミッチェルは、経済学者の基本的分析が常に数量的であるよりも質的に考慮すべきであることを知っているべきである、ということが経済科学の方法論の問題の把握に帰せられるべきことで

ある、と考えていた。経済学者が数量的あるいは統計的研究に注ぐ解釈の枠組みは、それ自体が質的分析あるいは帰納的分析の問題である。統計的分析は、その分析を導く一般的な解釈の枠組みに適用することはできない。このためにミッチェルは「経済理論の数量的分析」に関する論文の中で鋭い観察とともに、経済学者の統計手法の急速な進歩にもかかわらず質的な特質が彼らすべての研究に残っている、と述べている。経済研究を行なうための統計的手法を非常に賞賛しているにもかかわらず、ミッチェルは科学的な洞察力や演繹的な説明によって助長されない統計的分析がむしろ意味のない数量データの不毛な測定にすぎない、ということも決して忘れなかった。経済研究において科学的判断が統計的観察によって非常に助長されているということが次第に事実となってきているかもしれないが、最終的にはそのような判断は、何らかのひとつの方法論的手順にも独占されない広い常識という基礎に基づかなければならない<sup>(45)</sup>。

#### 4. グルーチーの所説の検討および今後の課題

以上がグルーチーの所説の骨子である。グルーチーはまず、ミッチェルとその心理学的理論との関連を述べている。ヴェブレンがマクドゥーガルらの影響を受け人間を内面（本能）から分析しているのに対して、ミッチェルの場合は、その後台頭してきたワトソンらの行動主義的心理学の影響を受け人間を外側（行動）から捉えている。しかし、ミッチェルもヴェブレン同様、制度が人間行動に影響を与える重要性を認めているという点においては共通している。またヴェブレンが消費や企業を主たる制度として分析したのに対して、ミッチェルは貨幣制度の重要性を強調している。さらに統計的手法を重視し、膨大な歴史的なデータを効果的に利用しようとした。このような視点が景気循環の分析にミッチェルを向かわせたといえる。ミッチェルにとっては実証的であることが重要であり、それがヴェブレンのように思弁的ではない特徴をもつ制度主義的理論の構築を生んだ、ということの説明している。これらの点についてのグルーチーの論理展開は見事である。しかし、グルーチーはヴェブレンとミッチェルの依拠した心理学理論の違いが、ヴェブレンとそれ以降の制度派経済学の非連続性の問題を生んだことやヴェブレンが本能心理学を重視したゆえに批判された点<sup>(46)</sup>などには全く触れていない点は制度派経済学全体の動向で見る上では不十分であったといえる。これらの点については改めて触れてみたい。

#### 《注》

- (1) たとえば、小原敬士著『アメリカ経済思想の潮流』、勁草書房、昭和廿六年9月卅日、173-225頁。  
ジョージ・ソール著、多田基、小林里次共訳『偉大なる経済学者たちの思想』政文堂、昭和49年9月30日初版発行、191-216頁などを参照されたい。

- (2) 例えば、ミルトン・フリードマンは「ミッチェルの経験的な研究は、それ自体、経済理論に対するひとつの貢献である」と述べている。(Milton Friedman, "Wesley C. Mitchell as An Economic Theorist," *Journal of Political Economy*, Vol. LVIII, December 1950, Number 6, p. 468)。また、ハチソンも「景気循環に関するウェズリー・ミッチェルの書物 *Business Cycle* (1913) は、この主題について英語で書かれた最初の大部で包括的な専門的労作だといってよいであろう」と述べている (T. W. ハチソン著, 長 守善, 山田雄三, 武藤光朗共訳『近代経済学説史 (下)』東洋経済新報社, 昭和32年5月10日第1刷発行, 156頁)。景気循環論については、例えば、次の論文を参照されたい。R. A. Gordon, "Wesley Mitchell and The Study of Business Cycle," *Journal of Business of Chicago*, Vol. 25, Issues 2, April 1952, pp. 101-107. 根井雅弘は「ミッチェルは、一般的には、統計的データを駆使した景気循環分析の仕事 (例えば、『景気循環論』1913年) によって知られている」と述べている (根井雅弘著『経済学のとそがれ』講談社, 1996年11月29日第1刷発行, 173-174頁)。
- (3) 当時のシカゴ大学については、小原敬士「ソースタイン・ヴェブレンとシカゴ大学: ヴェブレン評伝の一齣」一橋論叢, 1950年, 23(4), pp. 312-339などを参照されたい。
- (4) ミッチェルの伝統的な経済学に関する批判的吟味は *Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism* (New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1969) を参照されたい。
- (5) Allan G. Gruchy, *Modern Economic Thought: The American Contribution* (New York: Augustus M. Kelly • Booksellers, 1967), pp. 253-273.
- (6) *Ibid.*, pp. 253-254.
- (7) *Ibid.*, p. 254.
- (8) Wesley Clair Mitchell, "Thorstein Veblen," *The Backward Art of Spending Money and Other Essays* (New York: Augustus M. Kelly, Inc. 1950), p. 299 and p. 302.
- (9) *Ibid.*, p. 299 and p. 302.
- (10) Gruchy, *op. cit.*, p. 255.
- (11) Wesley C. Mitchell, "Wieser's Theory of Social Economics," *The Backward Art of Spending Money*, p. 254.
- (12) Gruchy, *op. cit.*, p. 256.
- (13) *Ibid.*, pp. 256-257.
- (14) Wesley C. Mitchell, "The Role of Money in Economic Theory," *The Backward Art of Spending Money*, p. 170.
- (15) *Ibid.*, p. 170, footnote 69.
- (16) *Ibid.*, p. 170.
- (17) Gruchy, *op. cit.*, pp. 258-259.
- (18) Wesley Clair Mitchell, "The Backward Art of Spending Money," *The Backward Art of Spending Money and Other Essays* (New York: Augustus M. Kelly, Inc. 1950), pp. 3-19.
- (19) Gruchy, *op. cit.*, pp. 259-260.
- (20) *Ibid.*, pp. 261-262.
- (21) Wesley C. Mitchell, "Wieser's Theory of Social Economics," p. 170.
- (22) Wesley C. Mitchell, "Human Behavior and Economics," *The Quarterly Journal of Economics*, November, 1914, Vol. XXIX, p. 3.
- (23) Wesley C. Mitchell, "Wieser's Theory of Social Economics," p. 117.
- (24) Gruchy, *op. cit.*, p. 264.
- (25) *Ibid.*, p. 264.
- (26) Wesley C. Mitchell, "Human Behavior and Economics," p. 3.
- (27) Gruchy, *op. cit.*, p. 265.

- (28) Wesley C. Mitchell, *Business Cycle*, Vol. 3 (Berkeley: University of California Press, 1913), p. vii.
- (29) Wesley C. Mitchell, "Business Cycle," *Encyclopaedia of the Social Science* (New York: Macmillan And Company Limited, 1932), Vol. III, p. 100.
- (30) Gruchy, *op. cit.*, pp. 266-267.
- (31) *Ibid.*, p. 267.
- (32) Wesley C. Mitchell, *Business Cycle*, 1913, p. vii.
- (33) Gruchy, *op. cit.*, p. 268.
- (34) *Ibid.*, p. 269.
- (35) Wesley C. Mitchell, "The Prospects of Economics," Rexford G. Tugwell ed., *The Trend of Economics* (New York: Knopf, 1924), pp. 27-28.
- (36) Wesley C. Mitchell, "Institutes for Research in the Social Sciences," *The Backward Art of Spending Money*, p. 59.
- (37) Gruchy, *op. cit.*, p. 270.
- (38) Wesley C. Mitchell, "Economics, 1904-1929," *The Backward Art of Spending Money*, pp. 400-401.
- (39) Gruchy, *op. cit.*, p. 271.
- (40) *Ibid.*, p. 271.
- (41) Wesley C. Mitchell, "Quantitative Analysis in Economic Theory," *The Backward Art of Spending Money*, p. 3.
- (42) Gruchy, *op. cit.*, pp. 271-272.
- (43) *Ibid.*, p. 272.
- (44) Wesley C. Mitchell, "Quantitative Analysis in Economic Theory," p. 31.
- (45) Gruchy, *op. cit.*, p. 273.
- (46) たとえば、佐々野謙治は、この立場に立っている。

(平成 24 年 9 月 28 日提出)